

IT 界の異端児、中国！？

酒井 寿紀 (Sakai Toshinori) 酒井 IT ビジネス研究所

携帯電話に独自規格を採用

近年中国では、IT の規格について国際標準に逆らう動きが目立つ。

その一つが携帯電話だ。

第二世代の携帯電話では、日本など一部の国を除いて、GSM と CDMA が世界の主流だ。第三世代では、GSM の後継の W-CDMA と CDMA の後継の CDMA 2000 が主流である。そして現在、第四世代の携帯電話は W-CDMA の後継の LTE という規格が全世界の標準になる方向だ。

では、中国はどうか？ 中国の通信会社は、政府によって 2008 年 5 月に 3 社に再編された。第二世代の携帯電話については、中国移动と中国聯通が GSM、中国电信が CDMA と、国際標準の規格を 2 社で分担している。そして 2009 年 2 月、これら 3 社に第三世代の携帯電話の免許が交付された。中国聯通には W-CDMA、中国电信には CDMA2000 と、それぞれ第二世代の後継規格の免許が与えられた。ところが中国最大の携帯電話事業者である中国移动には、TD-SCDMA という中国独自規格の採用が義務付けられた。

TD-SCDMA (Time Division - Synchronous Code Division Multiple Access) とは、W-CDMA などと同様にコード分割によって多重化する無線通信の規格で、W-CDMA との主な違いは、上りと下りの通信を周波数分割でなく時分割で実施する点である。時分割の方が、上りと下りの通信量が違うとき、周波数帯域を効率よく使えるという利点がある。

中国政府は 2006 年から本規格の実用

化を推進してきた。当初の計画よりかなり遅れたが、2008 年には 8 都市で商用試験サービスが始まった。

このように、中国では第三世代の正式認可は今年に入ってからで、その本格的な普及はこれからである。それにもかかわらず、中国移动は 2008 年 10 月に、第四世代に TD-LTE という国際標準の LTE の TD (時分割) 版を採用すると発表した。2010 年に試験ネットワークの構築を開始するという。

光ディスクも独自規格

DVD の次世代の光ディスクの規格については、ソニーを中心とするブルーレイと東芝を中心とする HD DVD が、世界中の機器ベンダーやコンテンツ・プロバイダを巻き込んで熾烈な主導権争いを繰り広げた。この戦いは、2008 年 2 月に東芝が HD DVD から撤退して、一件落着と思われていた。

ところが中国で HD DVD をベースにした独自規格が 2007 年 9 月に正式に発表され、これはその後 CBHD (China Blue High-Definition) と呼ばれるようになった。そしてこの規格は 2008 年 6 月に、国際的な組織である DVD フォーラムによって承認され、今年に入って本規格に準拠するプレーヤが発売された。

独自規格の行く末は？

ここには携帯電話と光ディスクの例をあげたが、独自規格の推進はこれらにとどまらない。AV 信号の圧縮技術などにつ

いても独自規格採用の動きがある。中国政府は現在推進中の5か年計画で「自主创新」をスローガンに掲げ、独自技術の育成、独自規格の制定に力を入れている。それは、外国へのライセンス料の流出を抑制するためもあるが、それだけでなく、IT関係の技術の根幹をすべて外国に押さえられると、国家の安全上も問題だという考えによるのだろう。

中国の人口は13億人で、日本の約10倍であり、世界の人口の20%を占める。これはEU27か国と北米を合わせた8.4億人よりはるかに多い。現在中国の携帯電話の加入者数は約6.7億人で、全世界の加入者数を40億人程度とするとその17%だ。しかし、中国の携帯電話の普及率はまだ50%程度なので、全世界に占める中国市場の比率は今後さらに増えると思われる。

このように中国市場は大きいので、たとえ独自規格であっても、中国内で十分普及すれば、規格として存在理由があり、また他国の企業にとって、その市場への参入は値打ちがある。現に、TD-SCDMAの市場には大通信機器ベンダーが多数参入を図っており、CBHDの市場には米国のワーナー・ブラザーズなどが食い込もうとしている。

しかし、独自規格が中国国内で十分普及するか否かが問題である。

携帯電話のユーザーにとっては、安くてよい端末が揃っていることが重要で、今後は中国でも電子マネーやGPS機能が要求され、またiPhoneやAndroidのOSの下で多数のアプリケーションが使えることも要求されるようになるだろう。ユーザーが欲するのはこれらの機能であって、通信方式の規格などどうでもいいのだ。

また、光ディスクについても、コンテンツの品揃えが豊富なことが重要なのであって、光ディスク自身の物理的、電気的仕様などどうでもいい。そして、携帯電話の品揃えや、光ディスクのコンテンツの豊富さで、中国独自規格が国際標準規格に太刀打ちできないのは明白である。

確かに、中国独自規格の方が、ライセンス料が少なくて済むだけ安い。しかし、TD-SCDMAなども基礎になる技術は国際標準規格と同じなので、ライセンス料がゼロになるわけではない。そして、中国市場がいかに大きいといっても、国際標準規格品の生産量の方が数倍多い。したがって、独自規格品のコスト・メリットには限度がある。

大国にとっても異端が通用しないのがITの世界ではなかろうか？ 中国独自規格の市場への参入を図る企業にとっては、アクセルと同時にブレーキが重要である。